

発掘調査の概要

古宮遺跡の調査（飛鳥藤原第152 - 8 次）

古宮土壇周辺は、推古天皇のおわりだのみや小墾田宮と推定されていた場所のひとつで、1970年、1973年に発掘調査をおこなっています。その結果、古宮土壇は平安時代のもので、小墾田宮とは直接関わりのないことがわかりました。ただ、7世紀前半代の石組池・石組溝や掘立柱建物がみつき、周辺は7世紀代から活発に土地利用されていたようです。

今回は、古宮土壇の南西を調査しました。調査地のすぐ南に県道桜井樫原線がとおり、ここが古代の官道である山田道をほぼ踏襲すると推定されています。飛鳥川の西岸では山田道に関する遺構は確認されておらず、位置や規模、造営時期についてはこれまではっきりしていませんでした。

調査の結果、3条の東西溝を検出しました。調査区の南を南東から北西に横切る素掘溝は、1973年の調査で見つかった7世紀前半代の溝と一連になる可能性が高く、また溝の南側が整地されていることから、この溝が7世紀代の道路の北側溝であったようです。その後、奈良時代～平安時代前半に再度整地して7世紀の溝を埋め、素掘溝がつくられます。3つめの東西溝も、この整地の後に、先につくられた2条の東西溝の北側に設けられた素掘溝です。

調査区周辺には『日本霊異記』に「豊浦寺の前の路」として山田道があらわれます。今回みつかった溝が山田道か、それに先行する道路側溝の可能性が高くなりました。飛鳥川の西岸でもついに古代の山田道が姿をあらわしてきたのです。

（都城発掘調査部 木村 理恵）



調査区全景（北から）

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第155次）

檜隈寺は、キトラ古墳の北西約600mに位置する丘陵の先端部に建てられています。渡来系の東漢氏やまとのあやうじの氏寺と考えられており、『日本書紀』の記事から、朱鳥元年（686）には現在の地に存在していたことがわかっています。1979～82年におこなった調査では、金堂・講堂・西門・回廊などが確認され、西を正面とした珍しい伽藍配置をとっていることが判明しました。また、塔跡には平安時代に建てられた十三重石塔が今なお残っており、重要文化財に指定されています。

今回の調査は、キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなうもので、檜隈寺の周りにどのような遺構が存在するのかを明らかにするために実施しました。その結果、主要伽藍の北東、丘陵東斜面の裾部分で南北棟の掘立柱建物と東西塀を確認しました。これらの建物と塀は、柱筋が檜隈寺の伽藍主軸と同じ方向を向いていることから、寺の主要伽藍と同じ時期に造営された施設であろうと考えています。また、これらとは別に、丘陵裾を取り囲むようにめぐる南北塀を2箇所を確認しました。現在のところ、この南北塀は、寺域の東限を示す区画施設ではないかと考えています。

今回の調査では遺構の一部を確認しただけで、その規模や性格などを確定できていませんが、丘陵裾部に寺院関連施設が存在していたことがわかり、檜隈寺が丘陵全体を寺院地として利用していたことが判明しました。本年度に実施する本調査で、檜隈寺の全体像が明らかになるのではと期待しています。

（都城発掘調査部 若杉 智宏）



丘陵裾部の掘立柱建物と東西塀（西から）